

## 研究室紹介

# 静岡大学 農学部 生物資源科学科 応用昆虫学研究室

静岡大学は、1949年に旧制の静岡高等学校、静岡第一師範学校、静岡第二師範学校、静岡青年師範学校、および浜松工業専門学校の5校が統合されるかたちで設立されました。農学部は、その翌々年である1951年に、静岡県立静岡農科大学が静岡大学へ移管されるかたちで設置されました。当初は農科大学のあった磐田市に農学部のキャンパスがありましたが、1973年に静岡市駿河区大谷にある静岡キャンパスへ移転しました。この静岡キャンパスは風光明媚な日本平自然公園の南西にある小高い丘陵地に位置し、北東に富士山、東に家康ゆかりの久能山東照宮、南に駿河湾、西に安倍川に生まれ登呂遺跡などを有する静岡平野が広がるなど、豊かな自然と歴史に包まれています。また、2016年には農学総合棟が建て替えられましたが、新たな建物には吹き抜けや学生の憩いのスペースが随所に設けられるなど、学生の快適なキャンパスライフを演出する設備になっています。

静岡大学農学部応用昆虫学研究室は、農林産業および環境保全の分野に貢献する人材の育成を目的とする生物資源科学科に属します。歴代教員として吉田正義、西垣定次郎、廿日出正美、廣森創および西東力の諸先生による運営を経て、現在は田上陽介および笠井敦の2名体制です。2025年度の学生数は、博士課程3名、修士課程5名（うち、留学生2名）、学部生11名です。なお、学部生は3年生の後期から研究室に所属します。

研究室のテーマは、田上による昆虫共生微生物と笠井による3栄養段階相互作用の再評価という2本柱となりますが、実際のところ学生たちの研究テーマはこれらにとらわれず様々です。例をいくつか挙げますと、ハムシ類の種間相互作用、細胞内共生細菌が宿主昆虫の性に及ぼす影響、土壌性ササラダニの分布と海流分散、アリガタバチの潜在的寄主範囲、アオドウガネがドウガネブイブイの分布に及ぼす影響、棚田におけるカエル相とそれらの生活史といった具合です。研究テーマの設定は学生それぞれの興味関心を極力尊重しますので、結果として多様なテーマや材料を扱うことになっています。我々教員にとってもこの状況は、研究手法を指導するティーチングというよりかは、学生を主体としつつ一緒に課題に

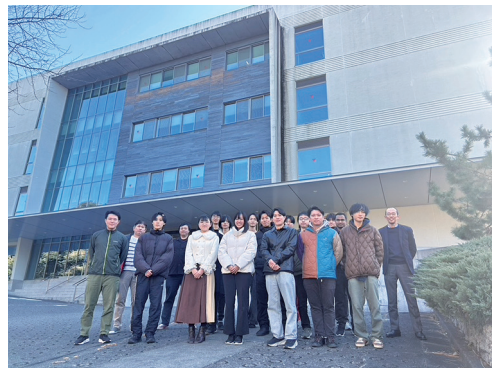


図-1 応用昆虫学研究室のメンバー

今も昔も、農学部随一のおおらかさは変わらないようです。



図-2 ナミハダニの世話をしているところ

手狭な実験室ですが、みんなで工夫して作業しています。

取り組むコーチングをとらざるを得ませんが、おかげで学生たちが我々教員の視野を率先して広げてくれる状況ですので、大変楽しいです。

私たちの研究室で掲げているルールはただひとつ、「科学者としてありたい姿・振る舞いを常に心がけること」のみにしています。このルールの解釈は当然メンバーごとに異なるはずですが、各々の理想が誰かに押し付けられたものではないからこそ、各自自分の意見も他人の価値観も同時に尊重できているようです。これからは多様な価値観を受け入れつつ、自分の在り方を模索する世の中ですので、研究室での活動を通じて学生たちがこうした考え方にうまく馴染んでもらえたらと願っています。

(准教授 笠井 敦)